

## エメ・セゼール 《生誕百年》

恒川, 邦夫  
一橋大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1430741>

---

出版情報 : Stella. 32, pp.1-38, 2013-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# エメ・セゼール 《生誕百年》

恒川邦夫

エメ・セゼールが没したのは2008年4月17日である。それから5年の歳月が流れて、この2013年に《生誕百年》の節目を迎えた<sup>1)</sup>。

生地のマルチニック島で国葬に付され、パリのパンテオンに銘版が飾られた。国葬に付された文学者は、19世紀のヴィクトル・ユゴーから数えて5人目になるという。モーリス・バレス、ポール・ヴァレリー、コレット、そしてエメ・セゼールである。あまりに数が少ないのと、一般には馴染みの薄い名前もあって、後代から見ると、なぜ彼らが国葬の榮譽をもって送られたのかわからないといってもおかしくない。《国葬》は大統領令によって首相が執り行う公的行事だから、時の政権の政治判断に左右されることが多い。パンテオンに祀るのも大統領の専権事項だから、これは大統領の器量を誇示する絶好のチャンスである。当時の大統領はニコラ・サルコジ、エメ・セゼールの死去は大統領に就任してからほぼ1年後の出来事である。ド・ヴィルパン内閣の内相時代から——極右が標榜する姿勢と変わらないと批判されるほどの——厳しい移民政策の実施者として知られた大統領が、〈人種差別〉の汚名を返上するためのスタンドプレーとも、一刻も早く植民地帝国時代の過去を清算して先へ進みたいという政治家の思惑の表れとも、見なすことができるだろう。いずれにしても長い人生を生き抜いて、没後5年、生誕百年の節目の年を迎えた詩人・政治家エメ・セゼールの真価は、国家による顕彰とは別に問われるべきものと思われる。

## 〈政治家〉エメ・セゼール

エメ・セゼールはその生涯の大半を〈政治家〉として過ごした。国会議員が勤続48年（1945-1993）、主都の市長が勤続56年（1945-2001）である。公正な普通選挙によって選ばれた政治家の最長不倒記録と言っていいのではないか。32歳そこそこで国会議員・市長に選出されてから80歳まで、途切れることな

く議員であり、議員を辞職したあとも90歳近くまで市長をつとめたことは、その事実だけで十分顕彰されるだけの価値がある。ここではその半世紀におよぶ政治生活の詳細を語る余裕はないが<sup>2)</sup>、道がけして平坦でなかったことは、国会での演説記録を読むとわかる。第2次大戦終結後の植民地の処遇をめぐる「海外県化法案」の策定に関わることから始まった政治活動は、ほどなくマダガスカル<sup>3)</sup>の暴動、インドシナ戦争、アルジェリア戦争と熱い血塗られた時代に入っていくにしたがって、神経が赤むけにされるような激しい偏見と言葉の暴力にさらされるようになる。彼の「植民地主義論」(1948年)<sup>3)</sup>を読めば、そこに名指しで批判されている数名の国会議員がいることに気づくだろう。「植民地主義論」の激しさは、当時の国会での言葉のやりとりの激しさに見合っていると考えてよい<sup>4)</sup>。例えば、議会でのこんなやりとりが記録されている――

エメ・セゼール […]。現実には、我々のところ [=現在は海外県に昇格している元植民地だったところ] では、貧困、弾圧、無知、人種差別が当たり前になっていて、日に日に憲法の精神は無視され、皆さんはフランス連合を〔本土と旧植民地の統一の紐帯ちゆうたいにするのではなく、人民の監獄にしておもうとしているのです。

ポール・カロン フランス連合の存在はありがたいことではないのか！

マルセル・プロンプフ フランスが存在しなかったら、あなたはどうなっていたと思うのか？

エメ・セゼール 他人に勝手なことをさせない人間になっていたでしょう。

ポール・テテン くだらん！

ポール・カロン あなたは祖国を侮辱する者だ。

(右手から野次) 何という恩知らず！

モーリス・ベルー あなたが読み書きを覚えたのは、一体、誰のお陰だと思っているのか！

エメ・セゼール ベルーさん、私に読み書きを教えてくれたのは、あなたではありません。私が読み書きを覚えたのは、自分たちの息子が教育を受け、いつか自分たちを守ってくれるようにと願って、血の汗を流して働いた何千というマルチニック人の犠牲のお陰です。[…]<sup>5)</sup>

これは1950年3月15日の国民議会議事録に記されている議論のひとつま一駒である<sup>6)</sup>。議長はエドゥアール・エリオ<sup>7)</sup>、議題は「フランスとアメリカ合衆国の間に交わされる相互防衛条約の批准」であった。すべての外交条約に関しては、本土のみならず、フランス連合も視野に入れて考えるという報告者の言葉を取り上げて、そもそも「フランス連合」とは何か、本土と植民地の間の連帯・協同を

うたいながら、その実態やいかなるものかというのがエメ・セゼールの発言の趣旨であるが、引用した箇所からうかがえる時代の空気、あからさまな偏見の言葉が国会の場で堂々と口にされる様子は印象的である。この時代から60年近い年月が経って、94歳で世を去ったエメ・セゼールを国葬に付し、バンテオンに祀るにいたるフランス社会の変化は、激しい黒人差別社会から、公民権運動を経て、ついに黒人大統領を選出するにいたる合衆国の変化と見合っているように思われる。もしこの偉大な〈変化〉をもたらした象徴的人物としてエメ・セゼールを顕彰しようというのであれば、たしかに彼は国葬に付すに値するかもしれない。共和制の理念に基づいて、国土を難民や移民に開いてきたフランスは、今や単純なカトリックの大国ではない。イスラム教徒も仏教徒もいる多民族国家である。したがって優秀な異民族出身者や有用な移民を中に取り込むことは、〈無用で劣悪かつ危険〉とみなされる移住者を排除するのと同じくらい重要な政治テーマである。冒頭に述べた政治家の政治判断とはそのようなものと考えるとわかりやすい。

〈政治家〉セゼールを〈詩人〉セゼールと比較して軽視するむきもあるが、筆者の考えでは、それは早計である。『エメ・セゼールの政治論文、国民議会における演説』や、同じく新刊の『エメ・セゼール全書誌』第2巻巻末の文献目録を参照して諸論文・演説を精査し、個々の判断を時々の政治状況に照らして考える労を省いて、軽々に断定するのは慎まなければならない。おおまかな構図は、エメ・セゼールが国民議会議員をやめた年の翌年——1994年——に出たラファエル・コンフィアンの告発の書『逆説的な世紀の横断』に描かれているものとそれほど変わらないかもしれないが、問題は表層的な時々の政治決断の善し悪しよりも、植民地主義や人種主義をめぐる問いかけの深さと思索の質——そしてその表現（詩）の卓越性——ではないだろうか。挫折の連続のように見える政治活動の苦悩が、セゼールの創作の源泉となって、詩や評論あるいは劇作が生み出されていったように見えるからである。〈政治家〉と〈詩人〉の両面は、まさにセゼールというヤヌスの双面である。そしてその双面の蝶番の位置に、〈母胎〉として『帰郷ノート』があるように思われる。

### 『帰郷ノート』

『帰郷ノート』は政治的なメッセージを内に含んだ詩である。アフリカから強

制連行された奴隷の子孫、奴隷制から解放されたあともプランテーションの季節労働者・工場労働者として搾取されつづけてきた島の黒人大衆に対して、戻ってきたひとりの〈知識人〉青年が意識の目覚めを訴え、みずから先頭に立って、残酷な歴史、過酷な現在を乗り越えて、未来を構築しようとする革命的姿勢がバックボーンになっている。しかし同時に、言葉の産み出す心像と響が渾然一体となった見事な詩句がちりばめられ、まぎれもない詩的空間が随所につくりだされている。そればかりではない。カリブ海の自然や社会を鮮やかに切り取り、奴隷船の地獄絵図にせまり、遙かな〈母なる〉アフリカへの目くばせ（単純な憧憬ではない）、欧米文明の疲弊や欺瞞の告発など、黒人を焦点にすえた〈人類〉的主题が数多く喚起されている。それゆえか、カリブ海やアフリカの黒人たちによるこの詩の受容はかなり特異なものである。多くの人が（さわりを）暗誦している<sup>8)</sup>。暗誦しながら、わだかまっている心理的葛藤<sup>ルサンチマン</sup>を昇華しているように見える。黒人の心中に巣食っている積年の屈辱感とそれと相反した自尊心の発揚、羨望と自負、文明と野生などの対立項が、『帰郷ノート』の詩句を朗誦することによって、昇華され、止揚されるかのようだ。言葉の力はすべての読者に平等に働きかける力でもあるが、彼らにとっては何層倍も強く響くのであろう。筆者がかつてマルチニック島を繁く訪れていたころ<sup>9)</sup>、復活祭の休暇を利用してカリブ海の詩人たちが集まる催事があった。カリブ海の他の島からも、フランケチエンヌ（ハイチ）やエルネスト・ペパン（グアドループ）が招かれてきたが、その席で、そうした朗誦の時間があった。初めて光景を目のあたりにしたときには、異様な感じがしたことは否めない。エメ・セゼールは〈教祖〉なのか、という思いが頭をよぎったものである。

『帰郷ノート』が初めて世に出た時点に遡り、さまざまな曲折を経て、1956年のプレザンス・アフリケーヌ版にいたるまでの経過を克明にあとづけた本が今年出版された。初版は2010年だが、『生誕百年』に合わせて増補改訂されたリリアン・ペストレ・デ・アルメイダの著作である<sup>10)</sup>。詳細は著作にゆずるとして、要点は『帰郷ノート』が今日の形になるまでにおよそ20年間の歳月がかけていることである。1939年にパリの雑誌『ヴォロンテ』<sup>11)</sup>に掲載されたものを初稿とすると、1956年にプレザンス・アフリケーヌ社から〈決定版〉が出るまでに3つの異なった版が出ている<sup>12)</sup>。詩の構想は1935年の夏、ユーゴスラヴィア出身の友人にさそわれて、この友人の故郷ダルマチア（バルカン半

島)を訪れたときに胚胎したというから<sup>13)</sup>、構想から〈決定版〉の出版までには、たしかに20有余年の時間が流れたことになる。詩人の年齢でいうと23歳から43歳である。そしてその20年間はただの20年間ではない。劇作を除く、ほとんどすべての主要な作品が書かれたといっても過言ではない20年間である。

### 1935年-1947年

伝記的に見ると、この20年間はさらに政治家として活動を始める前の10年と、始めた後の10年という2つの時期に分けることができる。前半の10年間は『帰郷ノート』の執筆に奮闘し、脱稿して雑誌に掲載されるのを見届けたのちに、妻子をともなって帰島し、ヴィシー政権から送られてきたロベール提督の支配下で、母校のシェルシェール高等中学校のフランス文学の教師をしながら過ごした日々である。教師仲間と雑誌『トロピック』を創刊し、詩・評論・翻訳など多彩な分野の作物を発表している。今日それらを読むと、後半の10年間に書く散文(「奴隷解放百年記念講演」「植民地主義論」「文化と植民地化」など)の萌芽を随所にもとめることができる。また詩は戦後に刊行される詩集『奇跡の武器』(1946年)にまとめられることになるが、中には『帰郷ノート』の一部として取りこまれるものもある<sup>14)</sup>。さらに閉塞状況の島で過ごした日々には、ナチズムを逃れて、アメリカ(北米・南米)に渡ろうという学者や芸術家たちがフランスの客船に乗ってやってくる。アメリカへ向う途中の寄港であるが、船から下りた乗客のなかにアンドレ・ブルトンとウィフレド・ラムがいた。彼らはおよそ1カ月島に滞在するが、その間にセゼールとの間に親交が結ばれる。黒人と中国人の混血であるキューバ人の画家ラム、シュールレアリスムの領袖ブルトン。ある日、彼らはフォール・ド・フランス郊外の山中アブサロンに遊ぶ<sup>15)</sup>——

スュザンヌとエメ・セゼールおよびルネ・メニルに案内された一行——ウィフレド・ラムと〔ドイツ人の〕妻ヘレナ・ホルツァー、アンドレ・ブルトンと妻ジャクリーヌ・ランバ、それにアンドレ・マッソン——は、とてつもない植物の繁茂の魔力に魅入られ、息を呑んだ(「あの緑の迷宮から我々は抜け出ることができるだろうか、我々がいたところは恐怖の門ではなかったか?」、と後にブルトンはマッソンに書くだろう)。神秘の森、蠢く森、原初の混沌が騒然たる堆積となって、生まれた姿のままに輝いて

いるところ……スュザンヌ・セゼールはこの遠足について、とても印象的な濃密な文章を書き残している——「ここでは生が植物の火で明らむ。[…]ここでは断崖を魅了するために、蔓がめくらめき、空中浮遊の素振りを見せ、その震える手で、太鼓の鳴る夜々から立ち上ってくるつかみどころのない宇宙の振動を把持しようとする。ここでは詩人たちも頭がくらくらするのを感じる……」<sup>16)</sup>

かくして、彼らとのコラボレーションが生まれ、1942年にスペイン語版の『帰郷ノート』がハバナで、1947年初頭にニューヨークで英仏2カ国語版の『帰郷ノート』が刊行されることになる。前者にはバンジャマン・ペレの序文とラムの挿絵が、後者ブレンタノズ版にはアンドレ・ブルトンの序文「ある偉大な黒人詩人」が付されている。

ブレンタノズ版は、3年前にエメ・セゼールがブルトンに送った原稿が元になっているが、諸般の事情で刊行が遅れ、1947年になって日の目を見たものである<sup>17)</sup>。そしてそれとは別に、同年の3月末にパリのボルダス社から別の『帰郷ノート』が刊行されている。こちらのほうは詩人自身が手を入れ、新たなストロフを書き加えたり削ったりして、最終的にはブレンタノズ版よりも詩行が増えている。リリアン・ペストレ・デ・アルメイダの研究では、ブレンタノズ版はシュールレアリスムの色彩がより濃厚になっていて、構成上の変化も大きく、ある意味で別系統に属する版本になっているのに対して、ボルダス版はむしろもとの雑誌掲載時の構成に戻っていて、詩句の削除や追加は少なからずあるが、1956年のプレザンス・アフリケヌ社刊の決定版に直接つながるものと考えられる。しかしどの版にも詩人自身が関わっていることは確かなので、版本の多様性は、詩人自身の時々の判断の変化である。詩人の作品を克明に跡づける仕事をした研究者はほぼ異口同音に、セゼールの全作品の源泉は『帰郷ノート』にあること、したがって他の作品の意味を正確に把握しようとする場合には、『帰郷ノート』の参照が不可欠であること、逆に『帰郷ノート』に萌芽として書き込まれているテーマのより成熟した展開を確認したければ、以後に書かれた詩集・評論・史書・劇作などを精査することが必要であると主張している。要約すれば、『帰郷ノート』はセゼールの創作の〈母胎〉になっているということだ。

ブレンタノズ版とボルダス版は同じ年に相次いで刊行されたが、前者が1943年の原稿を元に作られているのに対し、後者は1946年のセゼール自身による改

訂作業の成果と考えられる。エメ・セゼールの活躍の最初の20年間の分水嶺となる出来事は、1944年のハイチ滞在である。2つの版はこの分水嶺の前後に位置している。この滞在の重要性はさまざまな観点から論じられようが、本稿の関心事の観点から要約するなら、1802年のハイチ独立（ハイチ革命）を黒人解放の重要なメルクマールのひとつと考える詩人にとって、現実のハイチを知る貴重な機会であったと同時に、滞りが翌年の選挙戦への出馬の契機となり、市長、議員に選出されたことである。1946年の改訂作業は議員の仕事の傍らに進められた。議員としての仕事は「海外県化法」（マルチニック、グアドループ、レユニオン、ギアナの海外県化に関わる法案）の報告者のひとりとしての仕事である。問題は政府が旧植民地の3島・1大陸部の海外県への昇格を認めながら、最後になって本土の法律をそのまま海外県に適用することについて留保をつけたことである。そうすると、社会保険法などが直ちに適用されないという事態が生じることになり、本土と海外県の間に大きな格差が残ることになる。しかし法案はその問題を残したまま可決されてしまう。かくして、旧植民地の利害を背負った政治家としてのセゼールの仕事はただちに容易ならざる問題に直面したことになり、その後も長い間「完全なる統合」<sup>18)</sup>は宙に浮いた形になるだろう。近代化の衣の下に依然としてちらつく差別のお仕着せ、こうした現実には、『帰郷ノート』の改訂にも影響したであろうことは想像に難くない。政治詩としての骨格があらためて固められたゆえんである。同年の4月には『帰郷ノート』に続く詩集『奇跡の武器』も刊行されたことから、大戦中に雑誌『トロピック』に発表した詩の選別も行われて、『帰郷ノート』の性格づけもより明確になったように思われる。

フランス現代詩の出色の収穫としてブルトンに激賞されたのに続いて、ボルドラス版の出た翌1948年には、サンゴール編纂の『新黒人マダガスカル詩集』が刊行され、サルトルの序文「黒いオルフェ」によってセゼールの名声は一躍国際的になった。我が国での受容もサルトルの序文を境に、初めて真率なものになった<sup>19)</sup>。サルトルの論文はセゼールにおける政治と詩の融合に歴史哲学的な根拠づけをし、植民地解放へ向う運動が年々激しくなっていく40年代半ば過ぎから50年代終わりまでの——マダガスカル暴動から、インドシナ戦争を経て、アルジェリア戦争の終結へ向うまでの——フランスにおけるセゼールの活動を意義づけたように思われる。サルトルの論文は、『帰郷ノート』の骨組みに組み

込まれた政治性を大きな構図として是認しつつ、『奇跡の武器』の詩篇に結晶化しているセゼールの詩を数多く引用して、革命的意図と詩の真実とが一致した稀有な例だと称揚している<sup>20)</sup>。今日読み返してみると、テーゼ、アンティテーゼ、ジンテーゼという弁証法の運動によって説明する論の運びには、やや図式性が感じられて、古びた印象を抱かせるが、引用されているセゼールの詩句がつぼにはまっていて、散文に輝きを与えているように感じられる。序文は『奇跡の武器』の終わりに置かれた劇詩「そして犬たちは沈黙していた」<sup>21)</sup>の中の一行の引用をもって締めくくられている――

今日、《世界の土台を揺さぶり動かすような強烈なニグロの雄叫びをあげる》ことができる黒人たちの僥倖を嘉しよう。

リリアン・ベストレ・デ・アルメイダは著書の中で、エメ・セゼールは、島に封じ込められていた第2次大戦中に、『帰郷ノート』を中核とする3部作の叙事詩を書く構想をもっていたと記している。3部作の残りの2つは、『トロピック』誌に発表され、のちに詩集『奇跡の武器』に収録されることになる2篇の詩「サラブレッド」と「真昼」である<sup>22)</sup>。そして彼女は次のように言う――

この3篇の詩に「そして犬たちは沈黙していた」の初版を加えると、この多声部の美しいカンタータが3部作の叙事詩の見事な、ドラマチックなコードとなることがわかる。畢竟するところ、こう言えるだろう。叙事詩のあとに悲劇が加えられた、と。〔古代〕ギリシア人が、叙事詩の時代から、悲劇の時代に移行したように。

これら4篇の長詩（『帰郷ノート』『サラブレッド』『真昼』および「そして犬たちは沈黙していた」〔初版〕）には、テキスト間に多様な関係がある。意味が随所で交錯する極めて複雑な間テキスト性を探索するには、時間をかけた慎重な検討を要するだろう。そしてそういう検討にとりかかるには、これら4篇の作品の、生成研究的視点に立ってきちんと校訂されたテキストの存在が前提となるだろう。校訂作業は不可欠であり緊急を要する作業だが、大仕事であって、本書の域を超えていることは言うまでもない。<sup>23)</sup>

ここで言われていることのひとつは、『帰郷ノート』のような代表作にも信頼できる校訂版がまだ存在しないということである。この問題に関しては、アメリカ人のジェイムズ・スチュアートを監修者として、ケストローなど権威のある研究者が現在校訂版を準備中で、まもなく出版されるという情報がある一方、

その作業の過程で監修者と実際に作業に携わった研究者たちとの間で意見の対立があって、校訂版は詳細な註を施した学術的体裁を取ったものにはならないといううわさもある。それとは別に、4篇の作品（3篇の詩と1篇の悲劇）が一繋がり作品として構想されていたという指摘は興味深い。政治的メッセージ性が前面に押し出されて紹介されるきらいがある『帰郷ノート』<sup>24)</sup>を、詩のテキストとして、その〈言葉の力〉を前面に出して紹介するもうひとつの仕方を示唆するものである。4篇が渾然一体となって構成するひとつの詩的宇宙、〈ワグナー〉の楽劇を想わせるような劇的構成を示すことは<sup>25)</sup>、これまで等閑に付されてきた一面であり、長い眼で見たセゼールの受容において重要な意味をもつのではないかと思われる。いずれにせよ、セゼールの記憶が今後長く世に残るとすれば、現世における政治的活動——それに基づいた顕彰——によってではなく、ひとえに言葉の力、〈詩〉の力によってであろう。

#### 1948年-1956年

1956年にプレザンス・アフリケーヌ社から決定版の『帰郷ノート』が出るまでに、まだ約10年の年月がある。この期間は国会議員としてのセゼールの活動が本格的になると同時に、植民地帝国だったフランスの根幹を揺るがす出来事が相次ぐ動乱の時代である。マダガスカル、インドシナ、アルジェリアで分離・独立を求める運動が起こり多くの血が流される。1949年に中華人民共和国が成立し、共産主義者たちは新しい大きな同志国の誕生に勢いづくが、同時に新たな大戦への危惧が生まれ、冷戦構造の時代に突入する。セゼールは共産党所属の議員として、党の方針に依拠しつつ、基本的にはみずからの選挙母体であるマルチニック島、ひいてはフランス海外県全体（旧植民地）に関わる、貧困、失業、社会的インフラ整備の遅れ、制度的な差別などの是正を求めて請願・発言を繰り返している。また国際的な共産主義者たちの会合（「知識人平和会議」など）へ出席するために、ポーランドやルーマニアに出かけて演説をしている。党との関係もしばらくは良好である。スターリンが没した1953年にはモスクワで、葬儀に来て体調を崩したモーリス・トレーズ（書記長）と親しく会見している。関係がおかしくなるのは、1955年にアラゴンが提唱した「ポエジー・ナショナル国民的詩」をめぐる発言、要約すれば、詩人も「党の綱領に定められたレアリズム美学を尊重し、みだりに形式上の個人主義に陥ることなく、ソネット形式に戻れ」とい

う主張がなされたところからだろう。セゼールの応えは簡潔である——「詩は存在するか、しないか、それだけのことだ。国民的詩かどうかは、それからの話である」<sup>26)</sup>、と。しかしもっと根本的な問題は、やはりフランス共産党の体質の問題であろう。スターリンの犯罪行為が暴かれたあとも、親ソ姿勢を崩さない。東欧圏を支配するソ連の締め付けは、ポーランドやハンガリーへの軍事介入という形で現れてきたが、党は無批判である。次第に緊迫してきたアルジェリア問題に関しても、最終的に政府に一任するという態度で、明確な対決的姿勢を示さない。アルジェリア問題を自分が一貫して追及してきた植民地問題のひとつと考えるセゼールは<sup>27)</sup>、1955年に結成された「北アフリカにおける戦争遂行に反対する行動委員会」(バタイユ、ブルトン、レリス、レヴィ＝ストロースなどがメンバー)の会合に出席するが、共産党の立場との折り合いが悪く、歯切れのいい発言ができない。そして1956年9月に、ソルボンヌで第1回の黒人作家・芸術家会議が開かれる。セゼールはそこでもアメリカ、アフリカ、カリブ海、マダガスカルから集まってきた代表を前に、「文化と植民地主義」という講演をする。告発の書である「植民地主義論」の動に対して、文化とは何か、植民地において文化が疎外されるのはなぜかという哲学的・歴史的考察に収斂させた、言わば、静のテキストである。「植民地主義論」もこの年、プレザンス・アフリケヌ社から増補改訂版が大部(2万部)印刷されて出回る。そしてこの会議のほぼ1カ月後に共産党を脱退し、書記長に手紙を送るのである(「モーリス・トレーズへの手紙」)。セゼールのそれまでの政治活動が到達したひとつの結論であり、「植民地主義論」「文化と植民地主義」「モーリス・トレーズへの手紙」はその総決算を記した3部作とっていい。

同時期の詩業についても簡単に振り返っておこう。詩集として刊行されたのは『首を切られた太陽』(1948年)と『失われた体』(1950年)である。前者は前年の『奇跡の武器』に続く詩集で、72篇もの詩が集められていることから、いかにセゼールの創作力が旺盛であったかがわかる。後者はピカソがイラストを担当し、合計32枚の挿絵(エッチング2点、アクアチント10点、ドライポイント20点)が挿入されている。詩は10篇である。1950年代に入ると、詩集は刊行されないが、様々な雑誌に詩を発表している。その数は年によって違うが、とくに1955年にはその数が際立って多く、10数篇にのぼる。これらの詩は1960年の2月に刊行される詩集『鉄枷』<sup>てつかせ</sup>に収録されることになる。熱い政治

の季節であった1950年代に書かれた詩の集大成といえる詩集である。そしてこの新しい詩集が出たことで、セゼールの詩のマトリックス（『帰郷ノート』）も形が定まり固まったように思われる。そこに注入されるべきものと、そこから流れ出るべきものとが区分されたということである。56年に刊行された『帰郷ノート』が決定稿とされ、以後の版に有意な大きな移動がなくなるゆえんである。1961年4月に『首を切られた太陽』と『失われた体』の2つを合体させた詩集『土地台帳』が刊行されたあとは、20年後に出る最後の詩集『私は海草……』（1982年10月）を残すのみである<sup>28)</sup>。もちろんそこでセゼールの創作力が枯渇してしまったわけではなく、その空白の20年間に豊かな劇作の時代が挿入されることになるが、ここでは触れない<sup>29)</sup>。

1950年代のセゼールに関して、本稿で触れておきたいことがもうひとつある。1952年に『黒い肌、白い仮面』を刊行して登場したフランツ・ファノンとの関係である。ファノンは1941年から43年までマルチニックの名門高等中学校リセ・シェルシェールの生徒だった<sup>30)</sup>。セゼールが教師だった時期と重なるが、当時のファノンがセゼールの活動に関心をもった形跡はない。ヴィシー政権下のしめつけの厳しい島で、ファノンの関心はもっぱらド・ゴールの呼びかけに応じて、自由フランス軍に身を投じることにあった。43年、17歳のファノンは家出をして、隣の島ドミニカへ渡る。そこで尋問・訓練を受け、同じ英領のセント・ルシア、トリニダードを経て、合衆国へ行き、そこから欧州戦線へ送られる道が開かれていた。しかしほどなくロベール提督の支配が終わるために、ファノンは一旦マルチニックへ戻る。そして翌44年3月、今度は正式に自由フランス軍兵士の募集に応じて、フォール・ド・フランスの港から出航する。欧州の戦線で実戦を経験し、軍功を立て、2年後に除隊になって戻ってくる。バカロレアの口頭試問を受けずに出征したので、まずは学校へ戻って資格を取得した。次いで除隊になった若者に与えられる奨学金制度による奨学金を得て、1946年の末、再び島を離れる。この44年から46年にかけては、セゼールにとっても教師から政治家へ転身する重要な転換期にあたる。同時期、ファノンはみずからの身の振り方を決めるのに忙しく、セゼールへ強い関心を示す余裕がなかったように見える。そのファノンがリヨンの医学部で医学を学び、精神科の医師になり、やがてアルジェリア戦争にコミットしていく姿はよく知られている事実だが、そのかわら自由フランス軍の志願兵としての戦争体験とフ

ランス本土での生活体験を省みて、次第にエメ・セゼールの〈真実〉に目覚めていったように思われる。『黒い肌、白い仮面』の記述にしたがえば、「アンティル人は自分を黒ん坊だと思っていない。〔…〕黒ん坊はアフリカにいます。主観的かつ知的には、アンティル人は白人として振舞っている。しかし実際は黒ん坊なのだ。ヨーロッパに来てはじめてそのことに気づくだろう。人が黒ん坊のことを話しているとき、セネガル人のことだけではなく、アンティル人のことも言っているのだ」<sup>31)</sup>という現実を目覚めたということである。ファノンにおけるこうした意識の目覚めの遅れは、恐らく自身の出自が主都フォーラム・ド・フランスの中産ブルジョワジーであったことや、ヴィシー政権の抑圧が〈共和政〉フランスへの憧れを強くかきため、彼我の差に意識が向わなかったこととも関係があるだろう。1930年代にセゼールはパリでアフリカ人のサンゴールに出会い、黒人としての意識に目覚めたが、およそ一回り下の世代のファノンには、また別の回路が必要だったと言ってもいい。「[いずれにしても] 1940年まで、ひとりのアンティル人も自分を黒ん坊だと考えることができなかつた〔ことは驚きである〕。エメ・セゼールが出現して初めてネグリチュード＝〈黒人性〉を要求し、受諾したのだ」<sup>32)</sup>——そうした意識の目覚めのあと、ファノンの歩んだ道はセゼールの出発点のコンセプト〈ネグリチュード〉の精神を継承して、みずからが構想する「アフリカの新生」の夢に重ね合わせていったように思われる。白血病に侵されて志半ばで斃れたファノンは、その最後の著書『地に呪われし者たち』の第1章「暴力について」の末尾にも、セゼールの書いた悲劇「そして犬たちは黙っていた」を長く引用している。

セゼールとファノンの関係を論ずるには別に一卷の書物を要するであろうが、アルジェリア戦争に関連して、セゼールのコミットメントが不十分であったとか、政権を掌握したド・ゴールが打ち出した〈フランス共同体〉構想に対してマルチニック島の支持を取りまとめたセゼールを〈裏切り者〉として断罪する立場から、ファノンとの決定的な決裂を主張するのは、はたして正鵠を射ているであろうか。共産党を脱退し、1958年に「マルチニック進歩党」という新党を立ち上げたセゼールは、みずからの島の発展により細かな政策をもって心を砕く一方、国会議員として国政にたずさわる立場としては、海外県化の失敗を認め、新たに自立的な権限をもった複数の〈地域〉<sup>レジオン</sup>からなる地域連邦的共和政を構想した。モデルは1948年発布のイタリア憲法にもあり、アフリカでもセネ

ガルヤコート・ディヴォワールなど賛同するところがあった。問題はド・ゴールの提唱する〈フランス共同体〉構想の是非を問う1958年のレフェランダムに際して、アフリカ諸国が〈ノン〉と回答し、数年後の独立につなげたのに対して、〈自立的な権限〉の付与に期待して〈ウィ〉と回答し、(結果的に)裏切られた海外県との比較であろうが、21世紀の今日の現状からみて、はたして〈ノン〉と回答した海外県にどのような未来が約束されていたというのか不透明である。領土も資源も人口も比較にならない規模をもつアフリカ諸国と並べて論じることがそもそも妥当性を欠いている。ハイチ革命を〈理想〉として、島の独立を政治目標に掲げるアンデバンダンティストは今日なお存在し、選挙のたびに一定の票を獲得するが、決定的な勝者とはならない。外から見ている者の目には、理想と現実の戯れのように映る。それならば〈独立〉の理想に身を捧げたファノンが故郷の島マルチニックで高い評価を得ているかといえば、共和政の理念の根幹まで踏みにじった人間として、死後も長く、その名を口にすることがタブーとされ、復権されなかった。このように論じていくと、我々は独特にねじれたカリブ海人の〈心性〉に逢着することになる。セゼールとファノンの関係が簡単に論じられないゆえんでもある。しかし踏み込んだ議論としてではなく、ふたりに共通するひとつの性格、ある種の根源的な〈攻撃性〉のことは一言触れておく価値があるだろう。セゼールについては、夙に、長く内のためにこんだあとに、火山の噴火のように爆発する性格が指摘されているが、ファノンについても、神経が赤むけになったような、過敏な感受性の持ち主であったことが知られている。ふたりの違いは、その現れ方の違いである。セゼールの表現(詩)は、荒削りの天然石の中央に、研磨された金剛石のようなコアが形成されて、そこから人の眼を射る光が散乱するような形を取るが、ファノンの表現(散文)は、散文の皮膚の裏側に張りつめた神経組織がいつ皮膚を突き破って露出してくるかわからないような切迫感の形を取る。ファノンはセゼールが磨いた金剛石の武器——〈奇蹟の武器〉——を、必要に応じて自在に使いこなした。セゼールの〈ネグリチュード〉を継承し、その分、故郷の島とは距離を置いて、より広い文脈で植民地主義に対峙したとも言える。それは3歳年下で、直接セゼールの教え子とはならなかったが、詩人・政治家セゼールを注意深く見守り、〈カリブ海性〉を受け継いで、大きく発展させたエドゥアール・グリッサンの選んだ道と対をなすものである<sup>33)</sup>。

## エメ・セゼール研究の過去・現在・未来

人の評価は生涯を閉じてから始まる。人が生きている間はさまざまなタブーが存在し、知りたいと思うことが封印されていることも多い。作品は作品自体の力で生きるというが、それは作者が捨象されることを意味するわけではない。作者もまた作品と同様に、動かなくなつてから、忌憚のない眼差しの対象になるということである。作者に対して、作品の行間を読むときと同じ執拗で無遠慮な眼差しをさし向けることができるのは、作者がもはやその眼差しに対して生体反応を示さなくなつてからである。人も作品も時代の産物であり、歴史と個人の接点、個人史の重要な出来事などをコアにして作られる。その連関がよく解明されないと、本当の理解ができないことがある。『帰郷ノート』諸版の成立を導きの糸に見てきた本稿の考察からわかることは、セゼールの活動の大きな山が、第2次大戦の戦中から、戦後の1950年代にかけてあったことである。1960年代になると様変わりして、やや見通しの利く広い所に出た感じになる。そして1976年に初の全集が刊行され、ひとつのコーダが用意された。時にセゼールは63歳である。しかしそれから世を去る2008年まで、なお31年間生きたために、多くのことが未処理のまま放置されてきたように思われる。一例を挙げれば、妻スザンヌのことである。ブルトンがセゼールを発見し、〈偉大なる黒人詩人〉と讃えた文章の末尾で、「ポンチ酒の炎のように美しい」と讃えた知的な女性である。雑誌『トロピック』に合計7篇の論文を書き、同志として夫と共に活動した女性である。いつのまにか彼女の姿が消えている。1978年に『トロピック』の復刻版が出たあと、フェミニストたちがカリブ海の女性作家や批評家たちに目を向けるようになると、彼女の存在もいくらか掘り起こされるようになった<sup>34)</sup>。しかしセゼールとの関係は表に出て来ない。すでに亡くなっていることぐらいのことしかわからない。セゼールの死後、2009年に出版されたロミュアルド・フォンクワの書いた評伝で、初めてこの夫婦の離婚の話が出てくる<sup>35)</sup>。しかし微妙な筆使いがされていて、真相はいまひとつ不透明である。共産党を離脱し、新党を結成し、ド・ゴールのレフェランダムへの回答を取りまとめる作業など、政治課題の処理に没頭する1950年代末から、夫婦のすれ違いが深刻になり、妻のほうから離婚を申し出たという。しかし協議離婚という穏当な形にはおさまらず、訴訟になり、事由が必要なため、結局、愛人がいたと妻が告白し、それをもって1963年4月に離婚が成立したというのである。

スュザンヌはそれから3年後に脳腫瘍で没する。〈不倫〉という形になったためか、以後、彼女の名前は封印されてしまう。しかしセゼールの精神的痛手は大きく、残りの長い人生において、別れて逝った妻の思い出が随所に出現するという。伝記作者がそれを裏づけようとして引用するいくつかの詩は<sup>36)</sup>、信頼のおける他の考証家たちの解釈と大きく隔たっている。はたして発見なのか、牽強付会な自説の主張にすぎないのか判断がつきかねるところがある。ただ、セゼールの死後、スュザンヌを復権し、もう一度セゼールの傍らに彼女を座らせようとする動きが目立つようになった。本年6月26日のセゼールの誕生日にフォール・ド・フランスの旧市庁舎の前庭で行われた記念式典では、トニー・モリソン協会から贈られたベンチのお披露目があり、白いブラウスにマドラス模様のロングスカートという民族衣装の若い女性がベンチに腰掛けて、「スュザンヌ・セゼール、わが母」と題された散文詩を披露して、観客をしんみりさせた。散文詩の作者はセゼールの長女で詩人・作詞家として知られるイナ・セゼールである。筆者は10年ほどまえに、イナ・セゼールを訪ねて、両親について聞いたことがある。セゼールの家庭が子供の目からみてどんなふうだったか聞いてみたいという軽い気持からだ。「子供たちにやさしい、いい両親でしたよ」とイナはこともなげに答えた。筆者はその当時、離婚の事実についてはまったく知らなかったのである。イナ・セゼールが書いた散文詩とは次のようなものだ――

スュザンヌ・セゼール、わが母

わが母

彼女の抱く思想の炎のように美しい  
わが母は琥珀色の目をきらめかせて、  
黄金色に焼けたシャビーンヌ<sup>37)</sup>の明るい肌色で  
細身の優雅なシルエット、  
ちりちりに縮れた髪を大きく広げて  
私たち子供たちを面白がらせてから、  
鉄の櫛を使って梳かし  
火花を飛ばしてみせるのだった。  
わが母は、ピアノはなくても、ピアニストの先細の手をして  
紡錘形の指の間にはさんだ  
禁断の英国製のタバコから青い煙を立ち昇らせていた。

あの頃、タバコを吸う母親なんていなかったし、朝の珈琲を飲みながら、チェーホフを読む母親もいなかった……  
わが母は、トリコサ<sup>38)</sup>の質素な青いアンサンブルを着てもシャネルのスーツを着たみたいに優雅だった。  
「着るものなんて、何でもいいのよ！」と笑いながら言っていた。  
わが母は、夜になると、プチ・クラマルのヴィラ・ウィーク＝エンドにあった家の<sup>39)</sup>、私たちのベッドの横に座って、永遠に終わらない物語をしてくれた彼女のクーリヴィクター<sup>40)</sup>の物語がどこまでも果てしなく続くのは毎晩、彼女が続きを創って話してくれるからだ……  
わが母は自由を求める筋金入りの活動家、抑圧された人々のあらゆる苦しみに敏感で、あらゆる不正に反抗し、文学を愛し歴史に熱中し、父の仕事中は子供たちに静粛を命じた父は独特の神秘的な筆跡で、国民議会のレター・ヘッドの付いた白い紙の上に、倦むことなく、何か書いていた。  
わが母は評判のいい教員だった、教え子の一部から《ブラック・パンサー》の異名をもらっていたが、夜な夜な生徒の答案を添削していた、ときどき子供たちの中の年端のいかない者たちが、その答案にお絵かきをしたけれど、彼女はけて怒らず、面白がっていた。  
わが母はフェミニスト運動の先駆者だった、女性解放進展の一步一步を注意深く見守っていた。「あなたの時代は自分で選ぶ女性たちの時代でしょう」と、ある日、彼女は私に言った。  
だんだん、母の話はおとぎ話から現実の話へ変わっていった、マルチニックや別のところから伝わってくる、しばしば残酷な話だった。  
私が9歳だったときには、バス・ポワントの16人がボルドーの裁判所で裁かれる話だった<sup>41)</sup>。  
11歳のときに涙を流したのは、ジュリアス&エセル・ローゼンバーグの処刑の話だった<sup>42)</sup>。  
14歳のときに涙を流したのは、エメット・ティルの虐殺の話だった  
彼は、殺されたとき、私よりひとつ年上にすぎなかった<sup>43)</sup>。  
それらの涙が私の最初の政治的反抗だった。

わが母は辛辣なユーモア精神の持主、  
 憂鬱に彩られた陽気な精神、  
 頑健な体ではないが、けしてへこたれない人だった。  
 忘れがたきわが母は、いつまでも老いることのない、  
 スュザンヌ・セゼール、旧姓ルッシ<sup>44)</sup>、  
 ママン・スズヰ。そう私たちが呼んでいた人である。<sup>45)</sup>

大局的にみると、やはり、冷戦構造の崩壊を象徴する1989年のベルリンの壁崩壊以降、新たな世界秩序を模索する様々な動きの中で、カリブ海の若い世代——エメ・セゼールからみると孫にあたる世代——が打ち出した〈クレオール性〉が世界的な注目を浴びたことが契機になって、世界史の片隅に追いやられていたある部分に再び照明が当てられるようになったということではないだろうか。新時代のメディアの力に助けられてまたたくまに世界に喧伝され、勢いを得た感のある〈クレオール性〉の作家たちが、理論的支柱としたのは、父親の世代にあたるグリッサンであった。しかし、グリッサンを語ろうとすれば、〈祖父〉セゼール——〈植<sup>ネ</sup>地<sup>グ</sup>黒人の祖——を避けて通ることはできない。1993年、セゼールがほとんど半世紀におよぶ国民議会議員の活動から引退すると、フランス文部省は『帰郷ノート』と『植民地主義論』を高等学校3年生の文学の課題図書（バカロレアの試験の対象となる教材）に指定する<sup>46)</sup>。それから本年2013年まで、夥しい数の論文・注釈本・教科書・伝記などが出版されている。80歳になってから訪れた〈栄光〉であり、ブームである。21世紀に入って、〈ネグリチュード〉運動の盟友サンゴールの死去、セゼールの死去、グリッサンの死去、ファノン没後50年、アルジェリア戦争終結50年、そしてセゼール生誕百年など、1930年代から1960年代のフランスの歴史に深く関わった人々の死や出来事の記念行事が相続いた。セゼールに的を絞って言えば、没後5年の間に、セゼールの詩の読解のための基礎資料とでもいうべき文献が矢継ぎ早に刊行された。それらの大部分はベルリンの壁崩壊以前からセゼールの作品の解明に携わってきた第1世代の研究者たち（協力者の中には後発の研究者や若い人もいくらか混じっているが）である。したがって、現在80歳を超える人から70歳代の人たちである。具体的には、ベルギー出身で、最も早く新しい黒人詩人たちの登場に注目し、半世紀前（1963年）に『フランス語〔表現〕の黒人作家たち、ひとつの文学の誕生』を刊行したリリアン・ケストローの名前

がまず挙げられてしかるべきだろう<sup>47)</sup>。彼女はセゼールとも親しく交流し、セゲルス社の〈現代詩人叢書〉の一卷として書いた『エメ・セゼール』をはじめ、セゼールの解説に貢献する貴重な注釈本・解説本を数多く出版している。(もうひとりのよく知られた女性研究者ジャクリーヌ・レネールは、セゼールと同じ年に87歳で没した)。フロリダ大学名誉教授ベルナデット・カイエヤリスボン在のブラジル人女性リリアン・ペストレ・アルメイダなども古くからの研究者である。男性では、グアドループ人で、詩人セゼールの崇拜者のひとりダニエル・マクシマン(セゼールの遺稿の整理に関わっている)もそこに加えていいかもしれない。その他の人々はすべて20世紀の最後の10年間に、ある種の〈歴史の見直し〉がなされる流れの中で、あらたにセゼール研究に関わりをもつようになってきた人々である。ユルム街の高等師範学校(ENS)でポストコロニアル・仏語圏文学を担当するドミニク・コンブも然り、スリジューのシンポジウムを主催したアンヌ・ドゥエールやロミュアルド・フォンクワ(カメルーン出身)も然り、すべてセゼール研究に関するかぎり新参者である。それが悪いというわけではない。またそうした動きが、古い表現で言うところの、大文学へ小文学を「回収」する動きだとも思わない。そもそも伝統的な狭義のフランス文学が、仏語表現文学を向こうにまわして、どのような独自性の甲羅からの中へ立てこもろうというのであろうか。〈クレオール性〉が発信したメッセージの最も現代的でポジティブな意義のひとつは、フランス文学のみならず世界のあらゆる文学の枠組みとして、狭義の〈国民文学〉の崩壊を示唆したことであろう。筆者が思うところはただひとつである。セゼール研究の礎石がやっと積まれて、生誕百年の年が研究元年ともいべき年になったのではないかという感慨である<sup>48)</sup>。

\*

最後に本年のエメ・セゼール生誕百年記念のシンポジウムに関連して、いくらか個人的な思い出に類することを記して、しめくくりとしたい。

9月11日、シンポジウムの会場となったスリジューの城館で最後の昼食を参会者全員で取ったあと、用意されたバスで最寄りのパリ行きが停まるカランティイーの駅まで行った。汽車が来るのを待っている間に、筆者はルネ・エ

ナヌ夫妻のいるところへ行って挨拶をした。シンポジウムの間も、食事の際に近くに座って何度か話をしたが、午前中の総括のセッションで、あと少しで83歳になりますと言ってみんなを驚かせた人である。カベリアの出身で、もともと軍医、植民地戦争についてまわったという話も聞いた。セゼールとは、1986年から89年にアンティル＝ギアナの衛生局長としてフォル・ド・フランスに赴任したのが縁で、職務上、市長のセゼールと親しく言葉を交わす立場にあり、それから詩人の作品の魅力にとりつかれ研究を始めるようになったという。氏の最初のセゼール研究に関わる刊行物は1999年に出版された『エメ・セゼール、傷ついた歌』である。69歳のときの著作である。筆者が初めて氏の発表を聞いたのは2003年にフォル・ド・フランスで開かれたセゼール90歳の誕生日を祝うシンポジウムの会場である。セゼールが詩で使う言葉の意味について、さまざまな分野の辞書や文献を博搜して読み解いてみせるのが氏の得意とする分野である。10年前のシンポジウムでは詩人の若き日の詩集の題名にもなっている〈首を切られた太陽〉<sup>ソレイユ・クー・クッペ</sup>についての謎解きである。誰にでも思い当たるのはアポリネールの詩集『アルコール』の最後の詩篇「ゾヌ」の中の一句「さようなら、さようなら／首を切られた太陽」である。これは夜明けに、住居のあるオートイユに歩いて戻ってきた詩人が見る、朱に染まった不吉な太陽のイメージである。しかし氏によると、「クー・クッペはアフリカに住む首の周りに赤い半月形の輪がついた鳥の名前でもある。雄はカリブ海ではノドアカと呼ばれたり、〈クロオヤジ〉と呼ばれている」ということになる。また『帰郷ノート』の最終行の最後の言葉「ヴェリシオン verriçon」は、その字義を誰もよく説明し得ない難解な言葉だが、氏は「ブリヤ・サヴァランが『味覚の生理学』の中で使っている言葉で、ご馳走を食べたあとに、唇と歯茎の間の空間に残った食物の粕を掃除する舌の回転運動を指す」という。最初にこうした説明を聞いたときには、穿ちすぎてゲテモノくさいような印象を受けたものだが、その後、10年あまりの間に、単独で、あるいは他のベテラン研究者と組んで、7、8冊におよぶ難解語の考証やいつかの詩集の注釈付き校訂版の出版、あるいはセゼールの政治演説集など未刊の資料を公にしてきた。(そうした氏の研究をひもくとくと、セゼールの難解な語彙は、動物学・植物学・〔古〕生物学・神話学・宗教学・人類学・民俗学・化学・物理・言語学〔および古仏語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語などラテン諸語、アラビア語、クレオール語、カリブ

海の原住民の言語、アフリカの諸言語などに由来する言葉の活用〕・古典語〔ギリシア語、ラテン語〕など百科全書的な知識に由来するもので、いわゆる造語に類するものは少ないことがわかる)。かくして氏は今日のセゼール研究における重鎮のひとりとなった。心身ともに若々しく、温厚で飾り気のない性格の紳士なので、筆者は別れの挨拶がてら敬意を表しに行ったのである。

その翌日、パリのリュ・デ・ゼコールの書店ラルマッタンにジャン・アムルツシュの本を探しに行った。エナヌ氏がカピリア人で、スリジーでの雑談の折に同じカピリア出身の詩人アムルツシュの話をしたのが印象に残っていたので<sup>49)</sup>、詩人の詩集や日記を探しに行ったのである。レジに来てふと見ると、よれよれの背広を着た、見覚えのある顔がある。『エメ・セゼール全書誌』の元祖であり、今年刊行された2巻本の著者のひとりトマス・ヘイルその人である。向こうも7、8年振りに会う筆者の顔を見て驚きつつ、懐かしそうに「ちょっと待って、本を見せるから」と言った。何のことかと思ったら、会計をすませたあと、書店の奥の棚に連れて行って、「これが2巻本だよ」というのである。「6月にパリに来たときに、シャンポリオンで買いましたよ」と私が答える。そろそろお昼の時間である。トマスが「実はお昼をケストローと食べる約束をしているので、すぐ行かなければいけない。そうだ今晚閑ならば会おう」と言った。ホテルまで迎えに来てくれるというので場所を教えて別れた。トマス・A・ヘイルはペンシルベニア大学の比較文学科の教授でフレンチ・ディパートメントの主任という肩書きだが、筆者とほぼ同世代(70歳)なので、講義はもたず、研究だけ続けているらしい。もともとアフリカ研究、特にグリオの研究をしていたが、博士論文のテーマにエメ・セゼールを選んで、1978年に新刊の『全書誌』のモデルとなる書物を刊行して高い評価を得ている。筆者との出会いは、2007年の春、おかしないきさつから、偶然マルチニックのホテルで一緒になったことによる。その春マルチニックで「セゼール学習研究センター」を主宰するクリスチアン・ラブシニエールが「モーリス・トレーズへの手紙」をテーマにシンポジウムを企画し、参加者を募っていたので、我々はそれに応じてやってきたのだった。ところが、ちょうどその時期に選挙が行われることになり、シンポジウムは急遽延期されることになった。しかしふたりとも、すでに飛行機の切符を購入しており、それぞれの大学での研究費の認可もおりていたので、いまさら旅行を取りやめることもできず、はるばるカリブ海の島まで飛んで来

たのである。着いた翌日のホテルの食堂で朝食を取っているときに、トマスから声をかけられ、お互いに拍子抜けで困ったものだと言いつつあったものである。それからの数日間は、マルチニック進歩党の本部があるテールサンヴィル（フォール・ド・フランスの下町）で開催された党大会——前年の暮れに亡くなったセゼールの盟友カミーユ・ダルシエールの未亡人が来ていたのが印象に残っている——に出て、党首セルジュ・レチミの演説の露払いのような格好で、それぞれ簡単な挨拶をしたり（これはどうも我々の滞在費を党費から捻出するための口実作りだったのではないかと思われる）、エメ・セゼールのいる旧市庁舎に表敬訪問に訪れたり、ラブシニエールの自宅に食事に招かれたりして過ごした。それ以来の再会である。スリジーのシンポジウムにはトマスも当然姿を現すものと思っていた。春には、シンポジウムの主催者から「参加者は6月刊行予定のトマス・ヘイル氏の『エメ・セゼール全書誌』に目を通しておいて下さい。本の手配は以下のところで受け付けています」というメールが全員に配信されたくらいである。ところがそれから数カ月経って、おかしなメールが流れてきた。要約すれば、今回刊行した本はコーラ・ヴェロンとの共著であり、この刊行物の著者としてシンポジウムに招待されるのであれば、ふたり一緒にして貰わないと困る、でなければ自分も招待を辞退するということである。そして、結論的には辞退したのである。辞退したからには、当然アメリカにいるものと思っていたトマスが、パリに来ていて、シンポジウムの日程がすべて終わった日の翌日に、パリの本屋のレジで鉢合わせになるというのは、偶然とはいえ、一種の神業かみわざのように思われた。

その夜、スフロ通りに面したレストランでトマスと向かいあった。お昼の食事はスリジーのシンポジウムにずっと出ていたセネガル人のスレイ・バも一緒だったという。ケストローはセネガルを本拠地としているので、バはかつての教え子、現在の研究仲間といったふうに見える。背の高い、体が背広の中で泳いでいるように見えるほどの痩身で、もの静かな人物である。話がエメ・セゼールの校訂版の件におよんで、ジェイムズ・アーノルドが横暴だという話をスリジーで聞いたという、「ああ聞いている。ジェイムズから相談されたこともある。彼は有能だよ」と言う。それは6年前に同じ人物についてトマスが下した判断と正反対である。アーノルドは2003年の生誕90年記念シンポジウムに来ていた。トマスはすかさず言ったものである。「あいつは馬鹿だ」と。もっと

も「頑固だ、頑迷だ」という意味で言ったのを、筆者が文字通りに受け取っていただけのことかもしれない。スリジーの話になって、なぜ来なかったのかと聞くと、「どうもフォクワが糸を引いているらしい。この頃は黒人文学関係の色々な委員会のメンバーになって、牛耳っているらしい。最初はふたりとも招待するように言っていたのが、途中で話が変わった。だからあとで誤解がないように、メールを公開したんだ」。「ケストローも初日だけ、リリアン・ペストレも前半で帰ってしまう。ベテラン研究者で最初から最後までいたのはバルナデット・カイエ（フロリダ大学）くらいかな。あとは不勉強な教員、博士論文準備中の学生、とびこみのアマチュアが幼稚な質問や、無意味なコメントを先を争って言いあう……スリジーといえ、高度の専門家の集まりと思っていたが、イメージダウンだ。終わり近くになってジャン・ジョナサン（シラキューズ大学、ハイチ人）がやってきたり、最終日にはダニエル・マクシマン（作家、グアドループ人）が来て長広舌を振るったりした。それにしてもこの歳になると、疲れるね。朝から晩まで人の話を聞かされるのは辛い」と筆者。「そう、私もそうだ。ある意味で行かなくてよかったと思っている。ああいうのは2、3日するとうんざりするからな」とトマス。明日ワイフが飛行場に着くから、今晚は荷物の整理をしなくてはならない、明日から別のホテルへ移るのでね、と言って、トマスは小雨の降る中を引き上げていった。この日の偶然の出会いをメールでリリアン・ペストレに書き送ったら、返事が来た。「メールを読んで笑ってしまいました。私もシンポジウムは少し退屈でした。みんな〔質疑になると〕重箱の隅を楊枝でほじくするようなことを、我先に手を挙げて言うんですから。それを毎回やらないと気がすまない人がいるから」と書いてある。詩人が世を去ったのはついこの間のことだが、論じられる主要な作品『帰郷ノート』は半世紀以上前の作品である。そしてその作品をめぐる本格的な研究してきた第1世代はいまや高齢化している。若い人たちにとっては、それらの先達を乗り越えてこそ自分の道があるという思いが強いだろうが、皮肉なことに生誕百年の年は、その第1世代が新たに世に送り出した出版物で、みずから大いに若返った年になったように思われる。

## 註

- 1) 《生誕百年》の式典は数多く行われたが、その皮切りは国際仏語圏機構が3月にセネガルのダカールで組織した式典であろう（3月19日-23日）。フランスからはギアナ出身のトビラ法相が出席したが、コロックとは名打ってあるものの、実際には政治的な式典行事が中心であったように聞いている。式典のタイトルが《Aimé Césaire, cahier d'un retour au pays central》となっているので、日本で『帰郷ノート』が最初に紹介されたときに「祖国復帰のノート」と訳されていたことが思い出される。《ネグリチュード》の文脈で、「帰郷」は「アフリカ回帰」と捉えられ、カリブ海の島へ戻ることではないと解釈されたからであろう。ダカールの後は、大きな催事としては、まず6月26日の誕生日を含む週に開かれたフォル・ド・フランスのコロック（6月24日-28日）である。このコロックも誕生日の26日には現職の首相が政府専用機で飛んできて墓参をしたり、セゼールが退職後に表敬訪問に来た人々を迎えるのに使っていた名誉市長室をセゼール記念室として公開するセレモニーでテーブルカットをしたり、長い表敬演説をするなど、政治家のパフォーマンスにかなりの時間が割かれた。そして9月初めにノルマンディーのスリジーで1週間におよぶ長丁場のコロック（9月4日-11日）が開かれた。その他各国の大学（例えばニューヨークのコロンビア大学）で、一種の〈偲ぶ会〉に類するものが開かれていて、そのすべてを数えあげれば相当の数にはのほるものと思われる。
- 2) 《政治家》エメ・セゼールの活動については、これまでに以下のような書物にそのいくばくかが紹介されている。後ろの2冊は評伝である——Ernest MOUTOUSSAMY, *Aimé Césaire, député à l'Assemblée nationale 1945-1993*, Paris : L'Harmattan, 1993 ; Raphaël CONFIAINT, *Aimé Césaire. Une traversée paradoxale du siècle*, Paris : Stock, 1994 ; Roger TOUMSON et Simonne HENRY-VALMORE, *Aimé Césaire, le nègre inconsolé*, Paris : Syros, 1994 ; Romuald FONKOUA, *Aimé Césaire*, Paris : Perrin, 2010.
- 3) エメ・セゼールの散文の中では最も有名なテキストのひとつ「植民地主義論 Discours sur le colonialisme」の増補改訂版はプレザンス・アフリケーヌ社から1955年に出ているが、その一部はすでに1948年の段階で雑誌『シュマン・デュ・モンド [世界の通り道] (Chemins du monde) に、初版は1950年6月にナンテールのレクラム出版から出ている（次註4の *Les Écrits d'Aimé Césaire*, 第1巻152頁参照）。
- 4) 《生誕百年》の節目の年に出版された本の中で、セゼールの政治活動を詳しく知るために不可欠な書物が数点刊行された——Kora VÉRON et Thomas A. HALE, *Les Écrits d'Aimé Césaire, Bibliographie commentée (1913-2008)*, 2 vol., Paris : Honoré Champion, 2013 ; Aimé CÉSIRE, *Écrits politiques, Discours à l'Assemblée nationale*, éd. présentée et établie par René HÉNANE, Paris : Jean-Michel Place, 2013. なお同書はひき続きマルチニックに保存されている政治的古文書（市議会・県議会の議事録、マルチニック進歩党の機関紙）を収集した第2巻の刊行を予定し

ているという。

- 5) 註2に記した *Écrits politiques, Discours à l'Assemblée nationale*, p. 77.
- 6) 議事録のこの箇所は註2に記した評伝のひとつ (TOUMSON et HENRY-VALMORE, *Aimé Césaire, le nègre inconsolé*) が夙に引用しているが (砂野幸稔訳の『帰郷ノート』(平凡社, 1998年)の解説「甦るセゼール」の243頁にも引用されている), ここではこの日のセゼールの発言の全体を活字に起こした新刊の『エメ・セゼールの政治論文, 国民議会における演説』に依拠している。議会や政治の舞台における同様の暴言は, 2012年の5月に発足したオランダ大統領の新体制で, ジャン=マルク・エロー首相率いる政府の国璽尚書・法務大臣に就任したギアナ出身のクリスチアーヌ・トピラ女史に飛ばされた「雌ザル *guenon*」という野次や, 「よいバナニアはあるが, よいトピラはない」[Banania は粉末ココアの商標だが, 第1次大戦でフランスの為に戦ったセネガル狙撃兵を思わせる黒人をモデルにして, くだけた口調のフランス語で〈こいつはうまい〉と言わせたロゴをトレード・マークにして売ったために, 人種差別的だとして批判され, 現在は公共の場で使用することが禁止されている] などといった差別的言辞が口にされるように, 半世紀後の今日でも, 残っている (「どうしてクリスチアーヌ・トピラは憎悪を一身に集めるのか」, 『ル・モンド』紙, 2013年11月8日付の記事など参照)。彼女は2001年の5月10日に議会で採択された「奴隷貿易とその結果生じた奴隷制を人道に反する罪と認定する」法律に名前を残す政治家である。筆者は彼女に2度会ったことがある。最初は10年前, フォール・ド・フランスで開かれたエメ・セゼール90歳の誕生日を祝う記念シンポジウムの際に, 壇上から満面の笑みを浮かべて「〈人道に反する罪の認定〉はあなたから学んだものです」とエメ・セゼールに語りかける小柄な黒人女性としてである。2度目はその翌年の3月にギアナの主都カイエヌを訪れたさい, 偶々地方選挙の真っ最中で, ワルワリ党を率いて選挙運動をしていた彼女に野菜市場で出会ったときである。近寄って声をかけると, エメ・セゼールの誕生日記念シンポジウムに来ていた日本人ですね, 覚えていますよ, と言った。
- 7) エドゥアル・エリオ (1872-1957) は第3共和政時代に3度も首相をつとめ, 戦後も, 国民議会議長に選ばれ活躍した左翼の大物政治家である。植民地の問題に関しては, 原住民に本土と同じ権利を与えることには反対であった——「もし我々が植民地の住民に本土の住民と同等の権利を与えれば, [少数派の]我々が植民地の植民地になってしまうであろう」(1946年8月27日の国民議会での発言)。
- 8) スリジエで顔を合わせたコンゴ人のアリコ・ソングロ (アメリカのウィスコンシン大学のアフリカ言語・文化学科の主任教授) も「コンゴの学校時代に, 教科書にのっていた『帰郷ノート』の詩句を諳んじていた。その当時は作者をてっきりアフリカ人だと思いこんでいた」と語った。セゼールが亡くなる数年前に, マルチニックの友人 (白人) が「彼が死んだら, アフリカが慟哭するだろう」と言った言葉が思い出される。
- 9) 1998年から2003年にかけて, 筆者はマルチニックのアンティル=ギアナ大学の客

員教授として、毎年1カ月半ほどの期間——年末ないしは春休み（現地の復活祭のころ）——を島で過した。

- 10) Lilian PESTRE DE ALMEIDA, *Aimé Césaire, Cahier d'un retour au pays natal*, Paris: L'Harmattan, 2013. 著者はブラジル人で、現在はリスボンに住んでいる女性だが、エメ・セゼール研究者として長いキャリアをもつ専門家のひとりである。
- 11) この雑誌はジョルジュ・プロルソンがレイモン・クノーと創刊したもので、1937年から41年まで続いた。プロルソンはその後ナチ協力者となって活躍するが、戦後は名前をジョルジュ・ベルモンと変えて、文学書の編集者、英語作家（ベケット、ジョイスなど）の翻訳者、ジャーナリストとして活躍し、過去を暴かれることなく、百歳の天寿をまっとうして2008年に没する。エメ・セゼールは高等師範学校のアグレガシオン指導教師の紹介で、前任者だったプロルソンをたずねて原稿を見せ、雑誌への掲載を決めた。
- 12) 以下に述べる1942年のスペイン語版、1947年に相次いで刊行されるニューヨーク版とパリ版である。
- 13) 友人の名はペテル・グベリナ、部屋の窓から見えた島の名前をたずねたところ、マルチンスカだというので、驚くと同時に、故郷の島マルチニックを想い出して、郷愁の念にかられ、詩稿のペンを取り始めたという。
- 14) 「〈死んだ〉海と絶縁して」（『トロピック誌』第3号、1941年）と「文学マニフェストの代わりに」（同第5号、1942年）の2篇。
- 15) アブサロンはかつて温泉場だったようだが、現在はランドネの出発点になっていて、古い空き家になった建物と駐車場があるばかりである。筆者もかつては週末毎に知り合いの中国人女性たちと出かけたものである。お惣菜屋をやっている台湾人一家のおばあさん、マルチニック第2の資産家といわれる中国人一族の若い奥さん、それにアンティル＝ギアナ大学で中国語の専任教師をしている台北大学英文科出身の女性がメンバーだった。マルチニックの山奥の密林で中国官話による会話<sup>マンダリン</sup>が丁々発止と交わされるのを耳にするのは不思議な経験だった。フォール＝ド＝フランスからルート・ド・トラスという道を車で上って行き、バラタ植物園の前を過ぎてほどなく、左手の谷間へ向う急坂を行き止まりまで下りると、そこがアブサロンである。そこで車を乗り捨てランドネを始めるのだが、谷間の水辺へ向うコースと、山の中へ入るコースがある。山の中へ入るコースは、しばらく急峻な山道を壁にへばりつくようにして登らなくてはならない。途中、見晴らしがきく場所があり、遠くフォール＝ド＝フランスの市街を眺めることができる。その向こうは海である。登りきったあとは、深い森林の中に降りていくような山道になり、道の両脇の木の間隠れにバリジェ（セゼールが創った〈マルチニック進歩党〉の党花）など珍しい熱帯の花が見える。木はマホガニーが多いと聞くが、幹が太く、荒くれた根が小径の地面を膨れた血管のように走り、人間が小さく感じられる。それでも現在はランドネのコースになっているので、休日には運動にきた人たちに会おうが、ブルトンたちが歩いた1940年頃は、さぞかし野生味に溢れた原始の森であつたらうと想像さ

- れる。
- 16) Daniel MAXIMIN, *Césaire & Lam, insolites bâtisseurs*, Paris : HC Éditions, 2011, p. 7. 文中のスュザンヌ・セゼールの引用は『トロピック』誌の第 13-14 合併号に発表された論文「大いなる隠蔽」より (註 44 参照)。なおラムはこのアブサロンの熱帯樹林の散策から着想を得て、油絵「ジャングル」を制作する。セゼールの最後の詩集『我は海草……』に、ラムの最晩年のエッチングの連作「告知」<sup>アノンシヤシオン</sup> (1982 年) につけた一連の詩が収録されている。両者の最後のコラボレーションである。「驚異の創作家」と訳した原語 *insolites bâtisseurs* はその中の一篇の詩のタイトルになっている。
  - 17) 『エメ・セゼール全書誌』によると、ニューヨークの雑誌『両半球』<sup>エミスフェール</sup> 第 2-3 合併号 (1943-1944 秋冬) に、ブルトンの「ある偉大な詩人」が「蛇使いの島マルチニック」という題で掲載されたさい、「本文はエメ・セゼールの詩『帰郷ノート』のためにアンドレ・ブルトンが書いた序文であり、『帰郷ノート』は両半球出版から近刊予定」という但し書きが付されていたが、この近刊予告は実現しなかった。そしてその代わりに、3 年後にプレントノズ版が出たということである。
  - 18) この言葉 *assimilation* は「同化」とも訳されるが、ここでは文化や地域の民族 (民俗) の個性を喪失する意味ではなく、あくまで「本土並み」の扱いを求める平等化の要求である。別に *intégration* という言葉も同義で使われているので、ここでは「統合」とした。
  - 19) なお極東 (中国, 韓国, 日本) におけるエメ・セゼールの受容に関しては、本年 6 月フォール・ド・フランスで行われた生誕百年記念シンポジウムにおける筆者の発表を参照——Kunio TSUNEKAWA, «La résonnance césairienne en Extrême-Orient (la Chine, le Taiwan, la Corée et le Japon)», sous pression.
  - 20) 「黒いオルフェ」における詩人の引用はサンゴールが編んだアンソロジーに出てくる多くの詩人たちに及んでいるが、ひとりセゼールだけはアンソロジーからの枠組みを超えて、『奇跡の武器』からも引用している。そのことから見ても、サルトルがセゼールを格別に評価していることがわかる。
  - 21) この詩は 1956 年の第 1 回黒人作家芸術家会議の際に、3 幕物の悲劇に書き換えられ上演される。1944 年のハイチ滞在以前にニューヨークのブルトン宛に送られた原稿では、主人公がトゥッサン＝ルーヴェルチュールとされているなど、その後のヴァージョンとはかなりの隔りがあるという。サルトルが参照しているのは、あくまで『奇跡の武器』の末尾に置かれた悲劇のヴァージョンである。
  - 22) この 2 篇の詩はもと一篇の詩として構想されていた。なお「サラブレッド」は 2012 年に刊行された『《クレオール》な詩人たち 1』(思潮社) に筆者訳がある。また「真昼」は本稿の末尾に筆者による試訳が掲げている。
  - 23) 前掲書 (前註 10 参照), 45 頁。
  - 24) 我が国で『帰郷ノート』の唯一の全訳本である砂野幸稔氏の本も『帰郷ノート』と『植民地主義論』を組合せて一冊に編んでいる点で、政治的メッセージに焦点が絞ら

- れていると言える。
- 25) リリアン・ペストレ・デ・アルメイダ自身が著書の中で「まさにワグナー的な」という言葉を使っている。前掲書, 44 頁参照。
  - 26) 「国民的詩について」, 『プレゼンス・アフリケヌ』誌, 新シリーズ, 第 4 号, 1955 年 10 月-11 月号。『エメ・セゼール全書誌』第 1 巻, 254 頁参照。
  - 27) 同郷の後輩（教え子）ファノンと比較して, セゼールがアルジェリア戦争に関連して, 積極的なコミットをせずにやり過ぎたというような批判が一部にあるが, 『帰郷ノート』以来セゼールの一貫した立場は植民地問題全体の仮借ない告発である。したがってある意味で, アルジェリア戦争だけを特別視することは, 木を見て森を見ない偏狭な考え方に墮するという思いがセゼールにあったとしても不思議ではないだろう。もちろん国権の近くに在る代議士という立場の制約があったことも否定できないであろうが。
  - 28) セゼールが自分の墓の墓碑銘に選んだ詩は, しかしながら『帰郷ノート』の一節ではない。それは『我は海草……』の中的一篇「ラグーン暦」である。「カリブ海の光と影」(後註 33) に拙訳がある。
  - 29) 黒人アフリカ諸国の独立, アルジェリア戦争の泥沼化で幕開けする 1960 年代は, 旧植民地にとって, 〈革命=独立〉闘争の時代から〈統治=国造り〉の問題に焦点が移る時代である。セゼールの浩瀚な歴史書『トゥッサン=ルーヴェルチュール』(1960 年) や劇作のテーマもそうした時代の変化に対応している。コロニアリズムもネオコロニアリズムに衣替えするだろう。
  - 30) 当時存在した唯一の高等学校。現在のマルチニックには多くの高等学校があり, 大学もある。
  - 31) Frantz FANON, *Peau noire, masques blancs*, Paris : La découverte, 2011, p. 185. 翻訳は筆者。
  - 32) *Ibid.*, p. 188.
  - 33) セゼール, ファノン, グリッサン 3 者の関係の詳細については, 『現代詩手帖』2012 年 9 月号・10 月号連載の小生の論文「カリブ海の光と影」, およびスリジーの生誕百年記念シンポジウムにおける発表 (Kunio TSUNEKAWA, «Fanon et Glissant, deux versants du “volcanique” Césaire», in *Actes du colloque Césaire 2013 : parole due, sous pression*) を参照。
  - 34) Maryse CONDÉ, «Unheard Voice : Suzanne Césaire and the Construct of a Caribbean Identity», in *Winds of Change : The Transforming Voices of Caribbean Women Writers and Scholars* (Adele NEWSON and Linda STRONG-LEEK, eds.), New York : Peter Lang, 1998.
  - 35) 前註 2 参照。
  - 36) 1959 年に『レ・レットル・モデルヌ』誌に掲載された 5 篇の詩のうち「地震」がそのひとつである。この詩は共産党とたもとを分かったことにより, 多くの仲間を失い, また政治的議論が戦わされる場ではかつての仲間たちから, 激しく追求される

- ようになった苦境を主題にした詩と考証されているが、伝記作者のフォンクワはむしろ夫婦の危機を主題にした詩ととらえている。1959年に書かれた詩なので、離婚が成立する1963年とはかなりの時日の隔たりがあり、詩が本来多義的であることを考慮に入れても、伝記作者の解釈にはいくらか無理があるように思われる。
- 37) Chabin, chabine はネグロイドの特色（縮れ髪、鼻腔の形）を残すが、白人により近いとみなされる混血種。
- 38) 原文 Tricosa は安物の衣類のブランド名。
- 39) 国会議員になったセゼール一家が移り住んだパリ郊外の住い。
- 40) Koulivikou はギアナのクレオール民話のトリックスターの名前を思わせるが、母親が子供たちに聞かせるお伽話のために創り出した主人公の名前であろう。
- 41) 1948年7月にマルチニックのバス・ポワントで起こった砂糖キビ農園の労働者と農園主の間の賃金闘争の余波で、9月にレリッツ農園の管財人が何者かに暗殺され、その容疑者として16人の砂糖キビ伐採の労働者が逮捕されて、フランスのボルドーで裁かれた事件。証拠不十分で無罪になった。
- 42) 1953年に合衆国で、ソ連に重要な軍事機密を洩らしたスパイ容疑で死刑になったローゼンバーグ夫妻のこと。
- 43) 1955年8月、合衆国のミシシッピ州で起こったリンチ殺人事件の犠牲者。有夫の白人女性に言い寄ったという理由で黒人の少年エメット・ティルが殺された事件。これが後の公民権運動を発動する原動力のひとつになったと言われる。
- 44) 原綴は Roussi.
- 45) Suzanne CÉSAIRE, *Le grand camouflage, écrits de dissidence (1941-1945)*, édition établie par Daniel MAXIMIN, Paris : Éd. du Seuil, 2009, p. 124 所収のテキストによる。テキストの終わりに «Ina Césaire, janvier 2009» と記されている。
- 46) しかし翌年になって、あまりに政治的に偏った立場のテキストで、バカロレアの指定図書にするにはふさわしくないとして、指定からはずされる。
- 47) 筆者の所有する刊本は次のものである——Lilyan KESTELOOT, *Les écrivains noirs de langue française : naissance d'une littérature*, Bruxelles : Université libre de Bruxelles, 1965.
- 48) セゼールの死後に刊行されためぼしい研究書を以下に記しておく（すでに註に掲げたものは除く）——M. Souley BA, René HÉNANE et Lilyan KESTELOOT, *Introduction à Moi, Laminair... d'Aimé Césaire*, une édition critique, Paris : L'Harmattan, 2011 ; Aimé CÉSAIRE, *Du fond d'un pays de silence...*, édition critique de *Ferremets* par Lilyan KESTELOOT, René HÉNANE et M. Souley BA, Paris : Orizons, 2012 ; Daniel Maximin, *Aimé Césaire, frère volcan*, Paris : Éd. du Seuil, 2013. .
- 49) Jean Amrouche (1906-1962). セゼールとも交流があったと聞かすが、今日刊行されているアムルッシュの『日記』(1928-1962年)にセゼールの名前は出てこない。しかし『エメ・セゼール全書誌』によると、1956年に「北アフリカにおける戦争遂行

に反対する知識人行動委員会」が発行したパンフレット「アルジェリア戦争と植民地主義」にはサルトル、アリウース・ディオップ（プレザンス・アフリケヌ創業者）、ミシェル・レリスなどの名前とともにセゼールとアムルッシュの名前があることが記されている。アムルッシュ没後1年の1963年の『プレザンス・アフリケヌ』誌の追悼特集にセゼールは一文を寄せている。

エメ・セゼール

## 真 昼

(断片)

止まれ、宿営だ！ もう少し先！ もう少し下！ 宿営だ！ こらえきれぬ生成は、  
 喚声と硝煙を矢継ぎばやに射かけて、  
 血に染まった足指を軍馬さながらそそり立たせる、

反乱が  
 起こった！

萎えた風の女王  
 ——太平のさなか——  
 昨日の砂利とごわめき  
 萎えた風の女王 だが記憶は執拗だ  
 膨れる肩  
 握力の失せた手  
 眠りの頬っぺたを軽く叩く女兒  
 美味な溺死者の果実に向って  
 舌なめずりする水  
 昨日の砂利とごわめき、萎えた風の女王……

群れの強襲。狂乱した戦士 おお カイン教徒<sup>1)</sup>の下顎  
 匍匐するめまい、極楽のハチドリ<sup>2)</sup>  
 噴出、交差、焼却、略奪  
 おお 蜻  
 光線の吐瀉  
 密かに枢要角<sup>3)</sup>を垂涎する花粉  
 自分、自分ひとり、手配された<sup>4)</sup>小船団  
 蠕動する恐るべき叫喚の中で  
 自分で自分にかじりつく。

ひとり、裸で！

原子の伝言が直撃する おびたしい接吻が  
 放出された分身の彷徨を雨樋のように誘導し  
 喘ぎ声<sup>5)</sup> バラ窓に輝く不実なユリの花の

苦悶の表情 やがて砂をかけられ、孤独が凶暴に  
 隠蔽される。

私は荒海に乗り出す  
 あふれる光の甘い乳 地衣類  
 有糸分裂 分厚い髄鞘物質  
 エオゾン<sup>6)</sup>  
 霧 絶叫する熱気<sup>しみ</sup>の衣魚たち  
 の間をぬって。

おお まばゆい脳漿の花々を食う緑色の眼をした  
 日輪の莫大な涼気

夜の神聖ならざる裸眼がその不透明さの中で  
 わが内奥の思い わが憎悪のエニシダを朗誦する！

胡麻色の高い岸辺をもつわが美しい国  
 そこにはわが善意の血の矢が青年の邪悪さで  
 煙を吐いている！

私は荒海に乗り出す  
 胸をはって、神秘的なゴム質の分離、巻きつく環礁、  
 獠猛な番犬の顔をしたオタマジャクシ、寡黙な酵母  
 遠雷のごとき錯乱  
 染色体の聖なる嵐の中を、  
 胸をはって、頭を上げて、原初の恐怖と秘密の  
 錯乱が  
 わが頭蓋の中で黄金の狂騒に火をつける 胸をはって、  
 頭を上げて、  
 忍耐、期待、上昇、回転、  
 変身、合体、未来風景の黄疸<sup>かさぶた</sup>の瘡蓋落とし、  
 胸重く、頭を上げて、へこたれない泳者のように  
 雨に打たれた暗闇の機銃掃射の間を  
 大空に回転する三段刺し網の間を  
 怒涛が砕ける度にさえずり声をあげる波飛沫<sup>しぶき</sup>の間を  
 幾多の不安の途方にくれた海峡の間を  
 頭を上げて  
 船旗の下を

誕生と夜明けのざわめきの中を。

世界の血潮 塩をふった唇  
 わが鋭敏な耳に激しく  
 激怒を襲装された  
 すすり泣き  
 その海草干し。

おお 海図なき幾多の抱擁  
 かまわないか？  
 噴出するココヤシの木  
 魅力の泉，散形花序<sup>7)</sup>  
 わが  
 重厚な  
 櫓は  
 泥土を  
 圧す  
 前進し  
 のぼれ！  
 ああ！ 梢！ 柔軟な明日，  
 水のコンマ，わが重厚な櫓は，桶なしで，流れに  
 逆らい，  
 水は先細りになった梢を押しつぶす。

泡よ！

私はもはや探さない。私は見つけた！

愛は枝々にひっかかり  
 愛は太陽の鼻孔を貫通する 愛は，青い  
 歯で  
 白い海をくわえ取る。

私は打ち倒された朝の円柱だ  
 私は焼かれた樹皮の正当なる炎だ  
 わが5本の指の囲い地では 森のすべての立木が  
 赤く染める，そうだ，  
 深淵の上に果敢な舞踏の百千の切っ先を

赤く染めるのだ。

広く、ああ！ もっと広く！ わが腰の四つ角に愛に打たれた  
騎兵隊を散開させよ！

増殖する糸状腫瘍<sup>フォンゴジテ</sup>

深淵は丘陵の生きた泡に息を吹きかけた

増殖する糸状腫瘍

暗殺された飛躍<sup>エラン</sup>

君たちは出発しないのか？

私はすでに雨と股関節痛の灰褐色の

重い道をたどるのであろうか？

わがいわれなき愛は温かい蛇の

側転をする

わがいわれなき愛は白い太陽の周りを一巡する

わが時の臓腑<sup>とき</sup>から生まれた愛は、突然のサルビアと緑内障の

荒廃の中で

不安な木靴、声なきサバンナのフロマジエ<sup>8)</sup>の木をひっかいている

すでに色褪せた太陽に包まれた私は空に向かって進むだろうか？

わが幾多の罪と植民地の辱めを受けたわが地獄の草々の

長い散乱が

〈鎮魂歌〉の洞窟に命を捨てた耳のように輝いている

空へ向かって？

おお 再生する硬い嘴をもった太陽の鳥

友愛の真夜中、わが無関心の大きな切り身が煮立てられる

唯一の河口

私はアラリア<sup>9)</sup>の息吹を聞く、

海浜の虚ろな光、

海の太陽の燠火<sup>おきび</sup>づくり、

沈黙

まといつくような嘲笑が聞こえる長髪の夕べ

蛙たちのはねるような音の連打<sup>10)</sup>の上に

夜の

えぐい

堅忍！

誰がわが喜びにひびを入れるのか？ 誰が昼間を渴望するのか？

誰が塔の上で陰謀をめぐらすのか？

わが血は猫なで声を発する  
 いくつもの鐘がわが膝の中で鳴る。  
 おお 粒立った砂地を行く人の翼のない歩行。  
 明日だって？ すでに今日が私から逃げ、崩壊している、  
 風いだ海に怠惰におぼれる者が肥育のために  
 食べ物をつめこむもの言わぬ神！

——さあ、ため息をつけ！ 堅果の周囲をごぼごぼさせる、死、  
 別の死、酸っぱく執拗な野生の葡萄！  
 悲惨

ああ！ 気が萎える、この音！ 踵<sup>かかと</sup>から入って、わが骨を  
 削り取る、  
 わが頭蓋骨の沸騰のさなかでグレイなバラ色の星。  
 やめろ！ 白状する、すべてを言おう。私は神ではない。  
 ツチボタル<sup>11)</sup>！  
 ツチボタル！ ツチボタル！

光。ああ！ この拒絶はなぜ？  
 何という血のしたたりか！  
 わが顔の上。

わが両肩にそって、厚い粘液の塊！  
 わが衰退は膝をついて激しく泣いた。

リーン！

信じられない退出が続出する！ 天の河の傾斜面の上で

私は鳥のように雷撃された花を壁にかける  
 千一の無益な鐘に火をつけて  
 わが新しい唾液の強力な早鐘を燃やす。

優柔不断。  
 毒気。噛み傷、神経症のために血だらけになった  
 側芽<sup>12)</sup> ……  
 世界のどこかでタム＝タムがわが敗北を打つ、

数丁<sup>マシエツト</sup>の鈍の下の荒々しい光の心棒が  
変調で落下する。

愛のアラム<sup>13)</sup>が  
私を揺すってあやすだろう、ラッパチヨウ<sup>14)</sup>より従順な私

わがレプラと倦怠は？  
血のタム＝タム  
闇のパパイヤ  
マンボ＝ジャンボ<sup>15)</sup> 強健な興かつぎ<sup>16)</sup>  
コリコンボ<sup>17)</sup> 強健な興かつぎ  
コリコンボ 思念の黄色い芯に夜の滴り  
白いキャッサバ<sup>18)</sup> の大きな目をしたコリコンボ  
コリコンボ 年の耳につめこまれた火の<sup>とんび</sup>鷲  
コリコンボ  
コリコンボ  
コリコンボ  
セクロピ<sup>19)</sup> が旋回する騒音の中で……

羽飾りが  
しずかに着席し、この火事場みたいな宴会場で金属的な  
交尾の<sup>つがい</sup>番を選んでる。雨！  
(私には理由がわからない、水乞いをした覚えはない)  
雨  
(私には理由がわからない、先史時代の<sup>ことづて</sup>言伝<sup>20)</sup> を送った覚えはない)  
雨、雨、雨  
私の中で雨は電撃的な肩を炸裂させる。

——エノス<sup>21)</sup>！ 私は生涯これら変わらぬたまたまの繁華な街角<sup>おのの</sup>戦き沈黙する  
幾多の手に  
おまえの夜の王国と紫色に変色した平和を見つづけるのだろうか？  
さがれ！ 私は立ちあがった！ 私の足はロバのいななきを<sup>22)</sup>発して もっと起伏のあ  
る国へ向う！

私はこれを最後に豊満な酔いに身をまかせて前進するだろう、  
わが黄金  
とわが<sup>むね</sup>嗚咽を<sup>こぶし</sup>心臓にあてた拳に握りしめて！

ああ！ われらが鋭利な爪の錨を日々の粥の中に下ろせ！

待つ？ なぜ待つのか？

ココヤシは指の間から後悔のように逃げていく

そして連打だ 足踏みだ

わがステップと短刀チヤラスコの顔の上に吹きつける否定の

めくらめく風

私は出発する。どこに着くあてもない。かまわない、私は出発する、

わが強靱な顎骨トリスムが作る笑いを浮かべて、先の知れぬ路へ歩みだす。

私は出発する。絶望の開口障害はわが口を少しも変形しない。

カラスにやるものはない<sup>23)</sup>。ずっと速くで、パグパイブの音がする。

私は出発する、私は出発する。海はひとつながりだ、くぼんでも水は去らない

私は言った、出発すると。砂地の明るみの中を、わが執拗な聖体パンさおだに向って、  
ケンタウロスたちが棹立ちになる。

私は出発する。硬い鼻面の風がわが忍耐力を嗅ぎまわる

おお刳り形<sup>24)</sup> シメズをはずされた大地

重い水をたっぷり含んだ肥沃な大地

君らの日は影にじゃれつく犬だ。

さようなら！

怠け癖のついた大地が太陽の頭の皮を剥ぐとき

君らは 紫色の海の中に、燃えさしの焚き木のように

煙をだすわが眼球を見出すだろう。

炎熱よ、過酷な愛情

ようこそ！

星々は天空の沼で腐敗する

しかし私は腐敗する星よりずっと確実に、密かに、猛烈に

前進する。

おおわが足取りの飛行曲線！

燃え盛る森につきすすめ。

かくしてすでにわが額の汗の玉とわが脈拍のバラは  
 (真昼) を射出機<sup>カタバルト</sup>で打ち出している。

(訳・恒川邦夫)

〔訳 註〕

- 1) 原語は cainite. カインとソドムを崇める 11 世紀の不可知論の立場を取る宗派のメンバーを指す言葉。
- 2) 原語は thaumalée. 首に襟飾りがついた雉<sup>きじ</sup>の一種で、観賞用に飼われる。あるいは金色の冠羽をつけたハチドリ。ここではカリブ海を特徴づける鳥ハチドリとした。
- 3) 原語は les points cardinaux 「基本方位 (東西南北)」。
- 4) 原語は nolisée, イタリア語の noleggiare 「(船を) チャーターする」から。
- 5) 原語は vagissement 「(赤ん坊の) 泣き声」だが、ここでは前後のエロティックなイメージから「喘ぎ声」とした
- 6) 原語 éozoon は古生物学の不思議な化石組織。動物か鉱物か学者によって意見が分かれる。
- 7) 原語 ombelle 「散形花序」は植物学の専門用語で、「花序軸の先端に有柄の花が沢山集合すること」をいう。
- 8) フロマジェ (fromager) は大木だが、精霊の宿る神秘的な木とされ、呪文や願い事が託される。
- 9) アラリア (arallie, ラテン名 *Aralia capitata*) は蔦に似た植物。根は朝鮮人参と同様の薬効があるとされる。ヴードゥーではシャンゴ神に属する。
- 10) 「蛙たちののはねるような音の連打」la clapotante batterie des grenouilles はカリブ海の島の夜に聞こえてくる蛙たちの鳴き声をイメージしたものと思われる。
- 11) 原語 cicindelle はラテン語 *cicindela* から派生した言葉で、ツチボタル (ver luisant) を意味する。
- 12) 原語 caïeu の球根の側芽を意味する。
- 13) 「アルム」arum はサトイモ科の植物。
- 14) 原語 agami はギアナの言葉で、黒い羽をした渉禽類のラッパチョウ (喇叭鳥) のこと。
- 15) mumbo-jumbo はアフリカのコンゴの神様。
- 16) 「輿かつぎ」tipoyeur はアフリカ (ルワンダ, コンゴ) の言葉で、族長や欧米人をのせて運んだ輿 (ハンモックの両端に竹竿を通し、上に人を乗せて運ぶ乗物) をかつぐ黒人を指す。
- 17) 原語 kolikombo はアフリカのバンダ族 (ウバンギ) の神話に登場するトリックスター。ルネ・マランの小説『バトゥアラ』に出てくる。
- 18) 「キャッサバ」cassave はアフリカ原産のトウダイグサ科の木本性植物。地中にできるイモを食用にする。マニオク、タビオカなどとも呼ばれる。
- 19) 「セクロピ」cecropie は熱帯アフリカ原産の木でトランペットツリー、カノンツリー

などとも呼ばれる。白く柔らかい木で、添え木や火おこしに使われる。セゼールは甲が黒くて、掌が白い黒人の手の比喩にこの木を用いる。葉は煎じて飲むと、熱さまし、炎症止め、咳止めの薬効がある。

- 20) 「先史時代の言伝」 messages pariétaux は先史時代の〈洞窟壁画 peinture rupestre〉のようなものを指すと思われる。
- 21) 「エノス」 Enos はエーゲ海に面したトルコの都市。
- 22) 原語 hihane はロバの鳴き声 (hi-han) を模した擬声語。もくもくと、辛抱強く歩くさまを表す。
- 23) 「カラス」 corbeau は比喩的に「強欲な人、臆面のない人」を意味する。
- 24) 「刳り形」 cimaise は部屋の壁面にしつらえられた刳り形（模様）のこと、絵などを掛ける場所に使われる。